

総論

満点	100点	目標得点	70点	試験時間	90分	偏差値	72
大問数	1	小問数	2				
【解答形式】		選択式	0/2問	記述式	1/2問	論述式	1/2問
【問題難易度】		C	2/2問	B	0/2問	A	0/2問
※問題難易度：C難問、B標準、A平易、を示す							

Topics

- 1：SFCを除いた慶應他学部に比べ、文学部における小論文の合否左右度は高い。英語が重要であることは他学部同様当然であるが、受験生の報告からすれば、英語と歴史の解答で少しばかり躓いても小論文で挽回することが可能である。ただ3科目のバランスがそれなりにとれていることが条件である。
- 2：ここ数年は、課題文の要約説明と意見論述の2問構成で、総字数は700字前後である。要約説明は、一般的な要約とはやや異なり、重要箇所のキーワードをただ抜いてまとめる「ベタ要約」では高得点にならないような出題になっており、今年も同じ傾向が見られる。また、要約説明ができていれば論述問題に対応可能かといえ、そうともいえない。設問1の理解を前提に、さらに踏み込んだ考察が求められていることが、設問指示から読み取れる。
- 3：ここ3年ほどは文学や芸術など表現をテーマにした課題文が使用されてきたが、今年はインタビュー記事が利用されている。難解な論理を繰り返したり抽象的なテーマを探求したりする、「書き言葉」としての課題文にこだわってきたこれまでの傾向からすれば、大きな変化と言える。しかし、テーマそのものは「国語」を巡ってことばと文化（文学）との関係を考えるものであり、いかにも文学部らしいテーマである。このテーマだから、あえてインタビュー記事を利用したのかもしれない。読みやすさに流されないで、テーマそのものにしっかりと対峙しなければならない問題である。

こんな力が求められる！

- 1：小論文を武器にしようとするならば完璧な読解力を備えることは前提であり、さらにその読解に基づいた理解力・論述力が求められる。また、表現力も重要だ。要約説明は、他学部とはやや異なり、自分の言葉で説明し直す力も求められている。また、出題されているテーマ自体が難しいので、単なる表面的な理解のみでは論述するのが難しいのも特徴だ。自らの視点で解釈し直したり、自分なりに論点を設定して論じたりする考察力が求められる。
- 2：文学部の課題文は、分量が多いのが特徴だ。完璧に読解して設問1を押さえなければならないので、読むだけでも時間がかかる。また、設問2の解答を充実させようとするれば、構想を練るのにも時間がかかる。これを90分で行うのは至難の業である。時間短縮の鍵は、何よりも読解力をつけることである。読解演習を繰り返し、完璧に読み取るためにかかる時間を短縮させていくほかない。制限時間の中で完璧に読み取り、充実した論述構成を打ち出せる力が重要である。
- 3：そのため、過去問演習が最良の対策である。お茶ゼミ「論文」の授業では、難解な課題文の論理読解解説を受けて理解し、設問に応じて文章を書くことを徹底的に繰り返す。そうして論理把握のコツを掴み、自力で読解し、それを展開して論述構成するようにしていく。読解力は課題文論文の基本なので、他学部の小論文対策としても一石二鳥の効果が期待できる。

【設問 I】

予想配点	25/100 点	時間配分の目安	30/90 分
字数	220 字以上 280 字以内	出題形式	課題文型
出典	水村美苗「世界中から『国語』がなくなる日」(『中央公論』2009 年 3 月号)		
難易度	B ※問題難易度：C 難問、B 標準、A 平易、を示す		

●注目すべき箇所：以下、お茶ゼミ論文科の予想採点基準を提示する。

ポイントは以下の二つである。

ポイント A：「普遍語」「国語」「現地語」それぞれが説明されている部分を抜き出して説明するのではなく、課題文全体の筆者の論理からそれぞれがどのように使い分けられているのかわかるように、関係性を整理して説明する。知識としてみなせるか否か、書き言葉か話し言葉かがポイントとなる。最低限押さえないポイントは、それぞれ以下の内容である。

【現地語】日常生活で伝達手段として用いられる話し言葉と書き言葉。

【普遍語】世界共通の書き言葉。流通することで知識が蓄積され、人類の叡智となる。ネット社会化する現在では英語であり、かつてはラテン語や漢語だった。

【国語】国民国家成立時に普遍語が現地語に翻訳されることにより、普遍語同様に知識の蓄積が可能になる書き言葉。

ポイント B：それぞれの関係性を明確にして捉えると、以下の比較要素を盛り込んでまとめたい。

1. 現地語が日常伝達手段として「話し言葉」に比重を置くのに対し、普遍語と国語は「書き言葉」に比重を置く。
2. 現地語で書かれたものは蓄積すべき知識としての対象になりにくい、普遍語と国語は知識の蓄積機能を持つ。
3. 普遍語は、人類の叡智を刻む書き言葉として、流通し機能する。
4. 知識として普遍語の翻訳が行われていく中で、現地語が書き言葉として知識の蓄積機能を持つようになる。知識蓄積の対象として読まれるべきものとなるのが国語。
5. 知識蓄積機能を持つ国語は、国家形成の流れの中で誕生する。
6. 現地語で書かれたものは自己表現に過ぎず読むべき価値が低い、国語はその多様性を守るためにも読むべき価値のあるもの。

※上記を踏まえて、以下の基準で評価する。基準は C 評価である。

A 評価 (21 点以上) ポイント A はもちろん、ポイント B の関係性が論理的に整理・説明されている。

B 評価 (18 点) ポイント A のみでなく、ポイント B の関係性の多くを表現しようとしている。

C 評価 (15 点) ポイント A の 3 つの内容がそれぞれ説明できている。

D 評価 (12 点) ポイント A の内どれか説明が抜けている、あるいは単なる要約で三者の説明が曖昧。

E 評価 (9 点) 3 つの言葉の説明になっていない。それぞれの言葉の意味が理解できていない。

補足：表記表現の善し悪しにより、適宜加点・減点されると考えられる。

【設問Ⅱ】

予想配点	75/100点	時間配分の目安	50/90分
字数	340字以上 440字以内	出題形式	課題文型
出典	【設問Ⅰ】に同じ		
難易度	C ※問題難易度：C難問、B標準、A平易、を示す		

●注目すべき箇所：以下、お茶ゼミ論文科の予想採点基準を提示する。

理解力：「水村氏の現状認識を踏まえた上で」と指示されているのだから、単に英語の公用語化に賛成か反対かといった議論をする以前にその現状認識が明示されねばならない。水村氏は、英語公用語化についての姿勢をはっきり示してはいないが、「書き言葉」として英語を理解する必要がある場合、同じく「書き言葉」としての国語を守る意義があると主張している。つまり、英語が普遍語となっている現状に対する悲観論からくる、感性・知的文化としての国語保護の訴えだと言える。これが明示されていることが、A評価（10点）の条件であり、その明瞭度が下がれば点数も下がることになる。

発想力：上記の理解を踏まえると、英語が公用語化した場合に、翻訳ではない形で英語と接することになる日本語が、国語として存続するのかどうか、その変化のありようについて、英語の公用語化を通して論じることが求められる。水村氏の悲観論に対する自分の立場を明確にするのが、基本的なアプローチであり、水村氏が捉えている「国語」と「普遍語」と「現地語」の関係性を「英語の公用語化」に置き直して考え、自分なりの論点設定ができるとういだろう（25点相当）。

※上記を踏まえて、以下の基準で評価する。基準はC評価である。

- | | |
|------------|---|
| A評価（21点以上） | B評価を満たした上で、具体的な事柄に関連づけて考察を深め、独自の日本語論としてまとめている。 |
| B評価（18点） | C評価を満たした上で、英語公用語化の議論を通して、国語としての日本語について、独自の論点から具体的に述べられている。 |
| C評価（15点） | 英語公用語化の議論から、水村氏への基本的立場（悲観論か楽観論か）を明確にしつつ、国語としての日本語について論じられている。 |
| D評価（12点） | 英語公用語論のみに終始し、国語としての日本語を論じる視点が弱い。 |
| E評価（9点） | 英語公用語についても国語についてもまったく論じられていない。 |

【発想例1】：（悲観論）ネット社会となっても多くの人が日本語表記に頼っており、英語による情報を翻訳して得ているのが現状である。しかし英語公用語化により日常生活における英語運用能力が高まると、翻訳を通さず英語として知識を得るようになる。そうすると日本人の知識も感性も英語を基盤として成り立つようになり、日本語は国語としての力をなくすため、公用語化には反対だ（日本語保護が必要だ）。

【発想例2】：（楽観論）日本古典文学は中国・朝鮮文学の影響を受けており、また近代文学においても、外国語の翻訳から新たな文体が登場した。古典文学も近代文学も同様に教科書に掲載され、日本文学として継承されている。つまり、英語公用語化により日本語が影響を受けたとしても、それにより変容した新しい日本語による文学を誕生させる感性が日本文化にはあるため、国語として残される文学が多様になるに過ぎない。

補足：お茶ゼミ生合格者の復元答案では圧倒的に悲観論が多かったが、そのような中では発想例2のような答案は評価が高くなるであろう。

構成力：一貫性をもって論理の流れを組み立てる力が求められる（20点相当）。

- | | |
|------------|------------------------------------|
| A評価（16点以上） | B評価を満たした上で、大人にも通用する説得力がある。 |
| B評価（14点） | C評価を満たした上で、高校生として十分な説得力がある論理展開である。 |
| C評価（12点） | 一貫した内容が保たれ、論の流れはやや拙くともある程度の説得力がある。 |
| D評価（10点） | 一貫性も説得力も、わずかしら認められない。 |
| E評価（8点） | 論が一貫しておらず、論理の流れが見えない。 |

表現力：高校生として当然求められるべき正確な表現（表記も含む）ができているかどうかに応じて、C評価（12点）を基準に評価を上下する（20点相当）。A評価（16点）、B評価（14点）、D評価（10点）

Benesse® お茶の水ゼミナール

点)、E評価(8点)。